



Title	看護学生の看護師志望への臨地実習の影響について
Author(s)	土井, 智生; 清水, 安子; 瀬戸, 奈津子 他
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2014, 20(1), p. 19-25
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56815
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

看護学生の看護師志望への臨地実習の影響について

土井智生*・清水安子**・瀬戸奈津子**・福禄恵子***

要旨

臨地実習のどのような経験が学生の看護師として働きたいという思いに影響しているのかを明らかにすることを目的として、実習を終えた看護学生(4年生)を対象にアンケート調査を行った。調査の結果、76人から回答を得た(回収率98.7%)。「患者に感謝された経験」や「患者に励まされた経験」など患者との関わりで看護師になりたいという思いが高まった学生は8割を超えており、上位を占めていた。また、「看護できた実感をもてた経験」や「モデルとなる看護師に出会えた経験」によつても7割以上の学生の看護師になりたいという思いが高まっていた。一方、「病棟のスタッフ同士の雰囲気や関係が悪かった経験」、「病棟指導者や看護師から冷遇された経験」によつて看護師になりたくないという思いが高まった学生は6割を超えており、上位を占めていた。アドバイスをもらつたり励まされたり、逆に、冷遇されたり厳しく指導されたりするといった経験では、看護師からの対応の方が教員からの対応に比べて影響しやすく、有意な差が見られた。

キーワード：臨地実習、看護学生、看護師志望

Keywords: clinical training, nursing students, motivation to be a nurse

I. はじめに

看護学生の中には「看護師として働きたくない」、「4、5年働いて辞めるつもり」のような感情を抱くものが少なからず存在する。看護についての専門的な知識や技術を学習し資格を取得しても、将来的にそれが活かされないのは、看護師不足が大きな社会問題となっている現状においては、その学生だけでなく社会にとっても大きな損失ではないか。そこで、このように学生が思う原因として、看護師として働きたいという思いを強くできるような経験、逆に働きたくないくなるような経験にはどのようなものがあるのかを目的とした研究をしようと考えた。

特に「(病棟)実習がしんどい」や「実習で看護師になろうと思った」という声を聞き、学習の最終段階である実習は、看護師志望に大きく影響するのではないかと考えた。先行研究では、臨地実習をこれから控えた3年生と臨地実習を終えた4年生での看護観を比較するもの¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾や、看護師という職業に対する意識の変化についてのもの¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾、臨地実習は大変だったかというものの⁶⁾はあったが、看護師として働いていこうという思いに対する臨地実習の影響について明らかにしたものはみられなかった。

したがつて今回の研究では、看護学生のどのような臨地実習経験が看護師志望に影響しているのかを明らかにすることを目的とした。

II. 目的

看護学生のどのような臨地実習経験が看護師志望に影響しているのかを明らかにすること。

III. 用語の定義

看護師志望：学生は看護師だけでなく、保健師、助産師などを目指して大学で学んでいる。看護師以外の職種を目指している場合であつても、様々な経験の中で「看護師になりたい」、あるいは「看護師として働いてもいいのでは」と感じる瞬間や出来事があると考え、看護師以外を目指す学生も含め、看護師になりたいという思いの程度を捉えるものにした。

病棟指導者：A大学が実習を行つてゐる病院では、実習を行つてゐる病棟ごとに臨地実習指導者を2人程度配置し、学生の指導にあたることができる体制を整えている。そのため、病棟看護師の中でも、臨地実習指導者として実習指導を行つてゐる者を病棟指導者とした。

IV. 研究方法

1. 研究対象

A大学で看護学を学ぶ学生で、臨地実習を終了した4年生を対象とした。

2. データ収集方法

全ての実習が終了し、対象学生が集合する場である看護師国家試験の模擬試験の終了時に調査

*大阪厚生年金病院 **大阪大学大学院医学系研究科 ***三重大学大学院医学系研究科

の説明を行ってアンケートを配布した。その際、研究の協力に了承する場合のみアンケートを記入するよう説明し、アンケートの回収をもって同意が得られたこととした。この日出席していなかった学生に対しては個人的に連絡を取り、調査の協力を依頼するとともにアンケートを配布し、同意が得られた学生からアンケートを回収した。

3. アンケート内容

アンケートは、①看護師志望状況（入学時と現在）、②臨地実習を通して感じたこと、③看護師志望への臨地実習経験の影響などについての質問項目に5段階リッカースケールの単一選択式で回答する内容とした。

4. データ収集期間

2010年9月26日から10月8日。

5. データ分析方法

2つ以上の回答や空欄があった質問は、その質問についてのみ無効回答として処理し分析した。項目ごとの回答を単純集計し、割合を算出した。また、アンケート内容③の臨地実習経験の質問項目のうち、病棟指導者や看護師からと教員からの影響を問う項目について項目間の影響の差を見るために Wilcoxon 符号付順位検定を行った。なお、統計処理には Microsoft Office Excel 2007 及びアドインソフト Statcel 2 を使用した。

6. 倫理的配慮

アンケートは無記名で行い、研究目的以外には使用せず、回答の有無や内容は成績には関係しないこと、データ収集や入力は筆頭著者（当時4年次学生）が行い、教員や病棟のスタッフは関与しないことをアンケートの表紙に記載した。また、

分析や発表においては個人が特定されないように配慮した。

V. 結果

アンケートは対象学生88人中77人に配布し、76部を回収できた。回収率は98.7%で、有効回答率は100%であった。

1. 入学時と現在の看護師志望状況

看護師として働きたいという思いは、入学時に0～4の5段階で3または4と回答した者は37人(48.7%)いたが、現在では41人(53.9%)になり、増加していた。一方、0または1と回答した者は25人(32.9%)から23人(30.3%)へと減少していた。回答の0～4を得点とした平均値は2.2(SD±1.4)から2.5(SD±1.4)へと高くなっていた。

2. 臨地実習を通して感じたこと

臨地実習を終え、臨地実習を通して感じたことに関する質問項目について1(全くそう思わない)～5(非常にそう思う)の5段階で回答してもらった。その結果を図1に示す。

「実習は楽しかった」に4または5と回答した者は29人(38.1%)に留まり、1または2と回答した者は25人(32.9%)であった。また、「実習はつらかった」には51人(67.1%)、「実習で看護師になる自信を失う体験があった」には33人(43.4%)が4または5と回答した。しかし、このような状況の中でも、「実習で自分は成長できた」には60人(79.0%)が、「実習で看護師になる自信を持てる体験があった」には31人(40.7%)が4または5と回答していた。

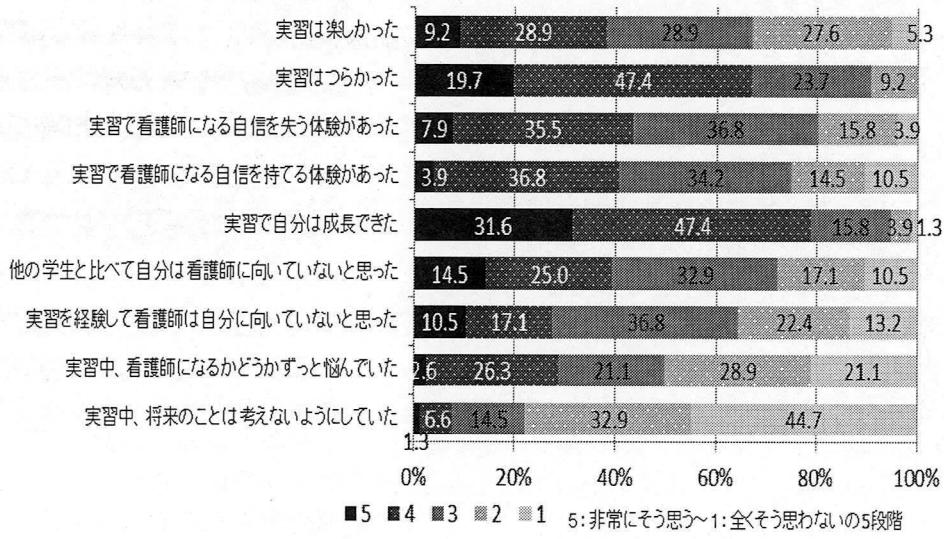


図1 臨地実習を通して感じたこと

n=76

適性に関しては、「他の学生と比べて自分は看護師に向いていないと思った」に対して、30人（39.5%）の者は4または5と回答し、「実習を経験して看護師は自分に向いていないと思った」には21人（27.6%）の者が同様に回答した。

卒業後の自身の進路に関しては、「実習中、看護師になろうかずっと悩んでいた」に対して4または5と回答した者は22人（28.9%）であったが、「実習中、将来のこととは考えないようにしていた」に対して4または5と回答した者は6人（7.9%）に留まった。

3. 看護師志望への臨地実習経験の影響

1) 看護師になりたいという思いが高まった経験

各質問項目の経験が看護師になりたいという思いにどの程度影響したのか、について4（すごく高まった）～0（全く高まらなかった）の5段階で回答してもらった。また、質問項目の経験がなかった場合には「経験なし」として回答しても

らい、経験がありの者の中での回答の割合を図2に示す。なお、（ ）にはその項目の経験がなかったと回答した人数を示した。

3または4と回答した割合が高かったのは、「患者に感謝してもらった経験」（65人；85.6%）、「患者から励ましてもらった経験」（63人；85.1%）、「良い方向へ向かう患者の姿を見た経験」（59人；77.6%）の順に高く、患者との関わりに関する項目が上位を占めていた。

次に、「モデルとなる看護師に出会えた経験」では、7割以上の者が3または4と回答していた。また、「少しでも看護できた実感をもった経験」では51人（70.9%）、「受け持ち患者や看護への理解が深まった経験」では48人（64.0%）であった。

対象学生が経験がなかったと回答した項目では「モデルとなる看護師に出会えた経験」と「病棟看護師の楽しそうに働く姿をみた経験」が14人（18.4%）で最も多かった。

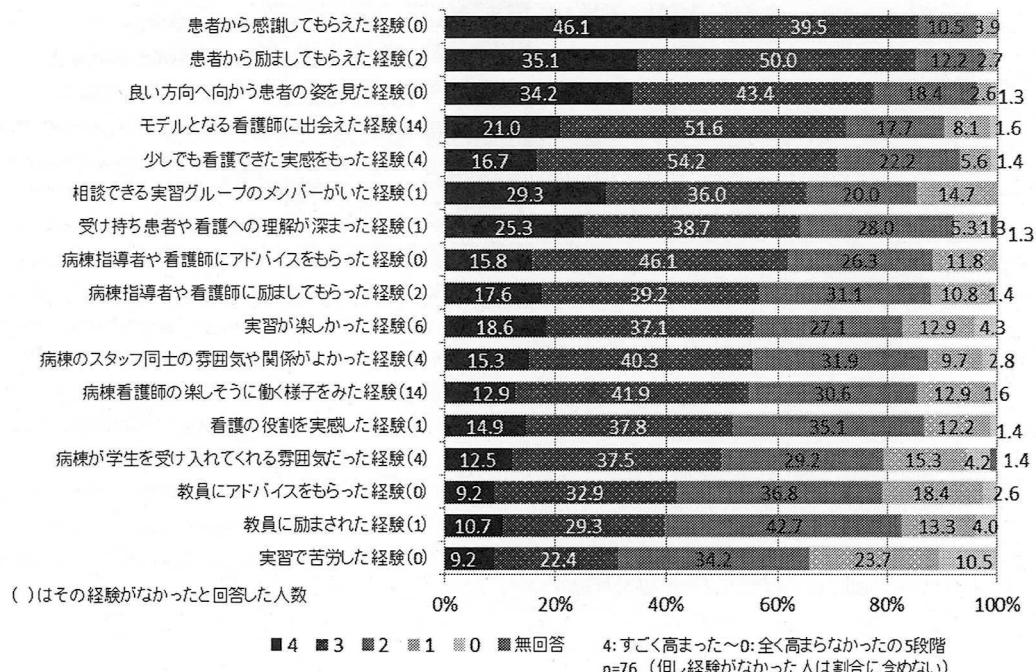


図2 看護師になりたいという思いが高まった経験

2) 看護師になりたくないという思いが高まった経験

各質問項目の経験が看護師になりたくないという思いにどの程度影響したのか、について4（すごく高まった）～0（全く高まらなかった）の5段階で回答してもらった。また、質問項目の経験がなかった場合には「経験なし」として回答してもらい、経験がありの者の中での回答の割合

を図3に示す。なお、（ ）にはその項目の経験がなかったと回答した人数を示した。

3または4と回答した者の割合は、「病棟のスタッフ同士の雰囲気や関係が悪かった経験」（47人；62.7%）、「病棟指導者や看護師から冷遇された経験」（41人；62.1%）が高く、この2つの項目のみ3または4と回答した者の割合が60%を超えていた。

「看護できなかったと感じた経験」では、36人(47.3%)の者が3または4と回答しており、「実習がつらかった経験」では34人(45.4%)が同様に回答していた。

患者との関わりに関する項目では、「患者に拒否された経験」12人(28.6%)、「改善のみられない患者の姿をみた経験」11人(18.0%)、「悪化の方向へ向かう患者の姿をみた経験」8人(16.0%)で、看護師になりたいという思いが高まった経験で患者との関わりが上位であったことと対照的

に、3または4の回答の割合は少なく、下位となつた。

対象学生が経験がなかったと回答した項目では、「相談できる実習グループのメンバーがいなかった経験」41人、「患者に拒否された経験」34人、「モデルとなる看護師に出会えなかった経験」32人の順で人数が多かった。経験がなかったと回答した者が0人であった項目は「看護できなかったと感じた経験」、「病棟が忙しそうな雰囲気だった経験」、「実習で苦労した経験」であった。

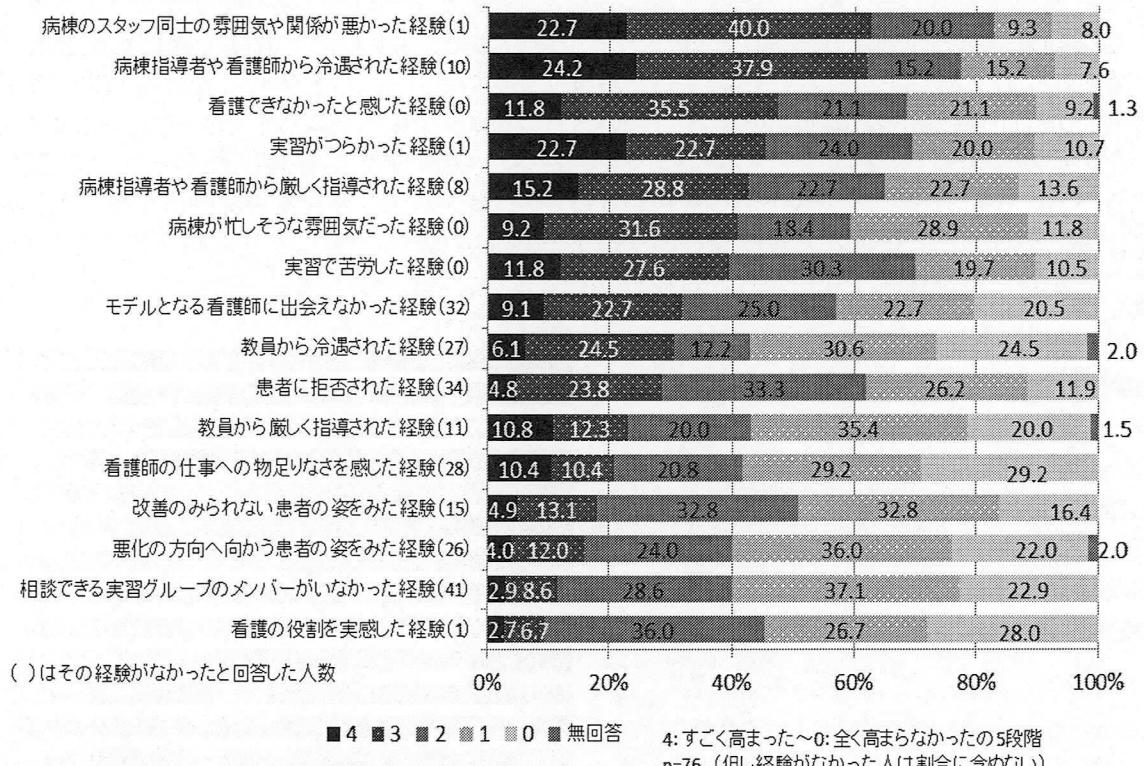


図3 看護師になりたくないという思いが高まった経験

3) 病棟指導者や看護師と教員での影響の比較

1)の結果では、同じ励ましやアドバイスをもらった経験でも、その経験が病棟指導者や看護師からであるか、あるいは教員からであるかによって看護師になりたいという思いが高まった人数の割合に違いが見られた。また、2)の結果では、同じ冷遇された経験や厳しく指導された経験でも、その経験が病棟指導者や看護師からであるか、あるいは教員からであるかによって看護師になりたくないという思いが高まった人数の割合に違いが見られた。

そこで、0～4の回答を得点とし、同じ経験間で病棟指導者や看護師からの経験の項目と教員

からの経験の項目で、項目間に統計的な有意な差があるかを両者から同じ経験をした学生を対象に、対応のある2つのデータとして Wilcoxon 符号付順位検定を行った(表1、表2)。

その結果、「励ましてもらった経験」「アドバイスをもらった経験」のどちらの経験も病棟指導者や看護師からの方が教員からより看護師になりたいという思いが高まる程度が有意に高かった($p < 0.05$)。また、「冷遇された経験」「厳しく指導された経験」のどちらの経験も病棟指導者や看護師からの方が教員からよりも看護師になりたくないという思いが高まる程度が有意に高かった($p < 0.05$)。

表1 看護師になりたいという思いが高まった経験の項目間比較

質問項目	得点	平均値 (中央値)	p
励まして もらった経験	Q6. 病棟指導者や看護師から	2.6 (3)	.006 (n=73)
	Q10. 教員から	2.3 (2)	
アドバイスを もらった経験	Q7. 病棟指導者や看護師から	2.7 (3)	.003 (n=76)
	Q11 教員から	2.3 (2)	

p: Wilcoxon 符号付順位検定

Q6 と Q10 の両方に回答していた 73 人、Q7 と Q11 の両方に回答していた 76 人で比較

表2 看護師になりたくないという思いが高まった経験の項目間比較

質問項目	得点	平均値 (中央値)	p
冷遇された 経験	Q6. 病棟指導者や看護師から	2.4 (3)	.000 (n=46)
	Q9. 教員から	1.5 (1)	
厳しく指導 された経験	Q7. 病棟指導者や看護師から	2.0 (2)	.005 (n=60)
	Q10 教員から	1.6 (1)	

p: Wilcoxon 符号付順位検定

Q6 と Q9 の両方に回答していた 46 人、Q7 と Q10 の両方に回答していた 60 人で比較

VI. 考察

1. 臨地実習における経験と看護師志望との関連

1) 患者との関わりによる影響

患者から感謝されたり励まされたりした経験によって看護師になりたいという思いが高まった学生は 8 割を超えていた。このことから、患者からの肯定的なフィードバックがあることは学生の看護師志望を高める大きな要因となることが分かった。講義で学んだ病態の知識や看護技術の実践により看護師の業務を理解するだけでは看護師志望は高まりにくく、うまくできた時に感謝されたり、状態が良くなる患者の姿を目の当たりにしたりすることで、自分が行ったことが患者のためになったと感じることができたのではないか。その一方で、「実習で看護師は自分に向いていないと思った」学生が 3~4 割いたことも事実であり、実習の様々な経験の中で「向いていない」と感じることも少なからずあるだろうが、だからこそ、患者のために役に立てたと感じられる経験は学生にとって簡単にあきらめない意志を支える重要な経験になるのではないかと考えた。

また、看護師になりたくないという思いが高まった経験では、患者に拒否されたり悪化の方向へ向かう患者の姿をみたなどの経験が影響したと回答した学生の割合は 3 割以下と比較的低く、予想に反する結果であった。一つには、患者から拒

否されるなどの経験をしていないと回答した学生が多かったことも影響しているかもしれない。しかし、先行研究で「学生は患者に対してはネガティブな反応も含めて自分を成長させてくれる存在であると捉えており、看護という仕事のやりがいと責任を実感することができていた」²⁾と述べられていることにつながる結果と考えられた。

2) 看護師や教員との関わりによる影響

励ましやアドバイスを受けた経験と冷遇や厳しく指導された経験、両者とも教員からの関わりに比べ看護師からの関わりがより大きく看護師志望に影響している結果となった。

看護師はその現場で実践している人であり、学生にとってその言葉は重く受け止められることも多い。看護師の励ましや冷遇は、その時々の指導内容としてだけではなく、「あなたなら看護師になれる」「あなたは看護師になれない」といった言葉に受け取ってしまう程の重みをもつものなのかもしれない。また、今まさに現場で働いている人の姿は、将来学生自身が現場に身を置いた状況として重ね合わせて想像され、励ましも冷遇も将来の同僚・先輩像として映り「一緒に働きたい」「一緒に働きたくない」といった思いにもつながりやすいのかもしれない。

2. 実習における看護師、教員の役割

看護師による関わりがより看護師志望に大き

く影響していたという結果を踏まえると、看護師はまず、自身の言葉が学生にとって看護師志望を高める力をもつことを認識する必要があるだろう。そして、実習においては看護に関する知識・技術習得のための指導が中心となるが、現場で働くからこそ分かる看護の魅力を学生に是非語り伝えてもらいたいと思う。

また、学生は看護師からの冷遇や厳しい指導を必要以上に重く受け止め「看護師には向いていない」「看護師にはなりたくない」という思いに至っている可能性もあるため、教員は、看護師からの指導内容を把握し、学生が冷静にその内容を受け止め、次の課題に向かって行動できるよう支援する必要がある。先行研究でも指摘されているように、教員が学生の相談相手になることは、看護師になりたいという思いを高めるだけでなく、学生の情緒的開放や心理的安定につながる⁷⁾ため、重要なことであると言える。

今回の研究で「病棟のスタッフ同士の雰囲気や関係が悪かった経験」「病棟指導者や看護師から冷遇された経験」が看護師志望を低下させる1位と2位の項目であったことを考えると、実習を受け入れる雰囲気づくりを病棟指導者と検討することも、教員の役割として重要であると考えた。

自身の臨地実習体験を振り返って、自分が成長できたと感じられている学生が多いのは、つらいと思った実習を乗り越えられたことが原因の一つではないかと考える。自信を持てた経験、自信を失った経験は相反する経験であるが、講義だけでは分かりにくい看護師の良いイメージと悪いイメージの両方を知るという意味では必要であると考える。しかし、これがきっかけとなって看護師になりたくないという思いが強くなりすぎてはいけない。学生の問題点や理解不足を指摘することは必要であるが、学生がその指導を励みにできるようにすることも重要であると考えた。「向いていない」と感じる経験をすることを回避するのではなく、この経験を一つのステップとして、学生がそれを乗り越えて成長できたと実感できるように病棟指導者や教員などが支援していくことが大切なではないか。

今回の研究では、患者との関わりは看護師になりたいという思いを高める結果であったので、看護師や教員からのアドバイスやフィードバックがより充実すれば、看護師になりたいという思いはより一層高まるかもしれないと考えた。看護師

からの対応も教員からの対応も、ほぼ全員が経験している(励ましてもらえた;看護師から97.4%、教員から98.7%、アドバイスをもらえた;看護師から100.0%、教員から100.0%)。つまり、学生にこれらの経験がなかったわけではないので、量の向上よりも質の向上や学生に関わる適切なタイミングが必要なのではないかと考える。

安酸⁸⁾は、臨地実習の場での経験をもとにした学習を促すために教員に求められる能力として、学生の能力に対する信頼、疑問を率直に話し合える学習的雰囲気づくり、経験の学生にとっての意味の焦点化と明確化の能力、患者理解の能力、現象を看護学的に捉えて言語化して示す能力、状況把握能力、臨床教育判断能力などをあげている。

学生は、実習の中で今までの生活とは全く異なる様々な経験をする。落ち込んだり悩んだりしながらも実習終了時には大きく成長した姿を見せる。教員からすると患者からの感謝や励ましを単純に喜んでいてよいのかと疑問に思うこともあるかもしれないが、学生の能力に対する信頼を置き、一緒に喜びを分かち合いつつその経験をもとに看護への理解を学生が深められるよう支援し、つらい経験も多々ある実習経験を通して、学生が学ぶ喜び、看護することへの喜びを感じることは、看護師への志望動機を高める上で重要だと考えられる。

3. 学生の臨地実習に対する姿勢

学生が臨地実習を通して看護師になりたいという思いを高めるには、臨地実習の環境の整備や他者からの支援を充実させるだけではなく、臨地実習に取り組む学生自身の姿勢も重要であると考える。看護師や教員からの厳しい指導は、自分に対する戒めだけでなく次に向かってのヒントだと捉えて、落ち込んでも「悔しい。だから次こそは頑張ろう」と次につなげていこうというように前向きに捉えることが大切だと考える。「看護師(先生)に…だと言われたから」ではなく、何がうまくいかなかったのかを考えて「自分で気付くこと」が重要であると考える。

患者や看護師、教員との関わりなど、様々な場面で学生は臨地実習中に看護師になりたいという思いが高まる経験をしていた。そのため、卒業後に考えている進路が看護師なのかそれ以外なのかに関わらず、この「看護師になりたい」という思いが高まった経験があった」ということを思い出し、次の困難な場面でも頑張っていこうという

積極的な姿勢で臨地実習に取り組んでいくことが必要だと考える。これにより、臨地実習が卒業後の進路として看護師が魅力的に感じられる大きなきっかけの一つになるのではないかと考える。

VII. 結論

学生の看護師として働きたいという思いが高まる実習での経験としては患者との関わりが多く、また、モデルとなる看護師との出会いや看護できた実感を持てたことも重要であることが明らかになった。

一方看護師として働きたくないという思いが高まる経験としては、病棟の雰囲気が悪いということを含め、看護師との関わりが多かった。

VIII. 研究の限界

今回の研究では、実習終了後に実習全体を振り返り想起して回答するという方法であったため、記憶の曖昧さの影響や実習先の病棟の違いによる影響が明確ではない点が研究の限界と考えられる。また、1大学だけでのデータ収集であったことも限界と言える。

謝辞

本研究を終えて臨地実習での学びの大きさや重要さに改めて気付きました。本研究にあたってアンケートにご協力いただいたA大学の学生の皆様ありがとうございました。また、A大学看護学生の臨地実習を受け入れてくださっている看護部長をはじめとする病院関係者の皆様、受け持たせていただいた患者様、お忙しい中実習指導をしてくださった臨地実習指導者並びに看護師の皆様にも感謝申し上げます。

本研究は大阪大学医学部保健学科看護学専攻平成21年度卒業研究の一部であり、日本看護学教育学会第21回学術集会において発表した。

引用・参考文献

- 1) 安藤詩乃、加世田有季、中越登子、中野正博 (2008) : 臨地実習前後における看護観の変化-看護学生の患者の捉え方に対する考え方の変化- バイオメディカル・ファジイ・システム学会誌、10(2)、1-7
- 2) 宮脇美保子 他 (2007) : 4年制大学における

看護学生の職業的社会化—2年生を対象として (第2報) 順天堂大学医療看護学部 医療看護研究、3、64-68

- 3) 宮脇美保子 他 (2008) : 4年制大学における看護学生の職業的社会化—3年次の臨地実習における体験に焦点をあてて (第3報) 順天堂大学医療看護学部 医療看護研究、4、57-63
- 4) 中目智子、高橋方子、竹本由香里、萩原潤 (2003) : 臨地実習体験と看護師志望意志との関連について 看護教育、115-117
- 5) 佐野望 他 (2008) : 新設看護学科に入学した学生の卒業前の職業意識の変化 第1報—看護職への気持ち・医療に関連した関心事項の変化 共立女子短期大学看護学科紀要、3、29-35
- 6) 和田恵美子、登喜和江、小笠幸子 (2006) : 段階的臨床実習における学生意識の経時的変化および経年変化 看護教育、437-439
- 7) 永田京子 (1999) : 看護学生が受け持ち患者との人間関係で体験する困難な出来事と学生自身の対処の実態 東京医科大学看護専門学校紀要、9(1)、21-29
- 8) 安酸史子 他 (2001) : 学生とともに創る臨床実習指導ワークブック第2版 第1部臨床実習教育の理論 医学書院、8-30